O S A K A

PHILHARMONIC

ORCHESTRA

主催：篠山町・(社)大阪フィルハーモニー協会

プログラム　PROGRAM

■序曲 「フィンガルの洞窟」 作品26
メンデルスゾーン

■THE FINGAL'S CAVE OVERTURE Op.26
MENDELSSOHN

■チェロ協奏曲 第1番 ハ長調
ハイドン

■CONCERTO FOR VIOLONCELLO AND ORCHESTRA No.1 C-Major
HAYDN

中くらいの速さで　Moderato
ゆっくりと　Adagio
極めて速く　Allegro molto

■交響曲 第5番 ハ短調 作品67 「運命」
ベートーヴェン

■SYMPHONY No.5 C-minor Op.67
BEETHOVEN

速く活気をもって　Allegro con brio
ややゆっくりと感動をもって　Andante con moto
スケルツォ：快速に　Scherzo : Allegro
快速に　Allegro

指揮：朝比奈　隆　Conductor : Takashi Asahina
独奏：秋津智承　Soloist : Chisho Akitsu
大阪フィルハーモニー交響楽団　Osaka Philharmonic Orchestra

1992年4月12日／たんば田園交響ホール　12th April, 1992/Tanba Den-en Symphony Hall

朝比奈　隆＆大阪フィルハーモニー交響楽団

大阪フィルハーモニー交響楽団は、1947年（昭和22年）関西で初めてのプロオーケストラ「関西交響楽団」として発足、1960年（昭和35年）「大阪フィルハーモニー交響楽団」に改組。以来40余年間、一貫して常任指揮者を朝比奈 隆が務め、その結果、独特のサウンドを持つ大阪フィルは、「個性と魅力溢れるオーケストラ」として親しまれている。

大阪フィルは、大阪での年８回をはじめ、他府県での５回と年に13回定期演奏会を行っており、中でも昨年で30年目を迎えた東京定期は、毎回熱狂的な支持を得ている。

過去２回のヨーロッパをはじめ、アメリカ、カナダ、韓国・台湾と海外公演にも招かれ、中でも、1975年のヨーロッパ公演の際、ベルリン、ウィーン、ジュネーブなど各地で最高の賛辞を得た。創立45周年を迎える今年秋には、第３回目のヨーロッパ公演を行う。

音楽総監督・常任指揮者の朝比奈 隆（文化功労者）は、日本の音楽界の重鎮であり、豊かな音楽性と深い音楽への情熱、造形的な素晴らしい構成力は、高い評価を得ている。海外での指揮歴も多く、1989年９月にはベルリン芸術週間に招かれ、ベルリン放送交響楽団を指揮、1990年３月にはリューベック、ハンブルグで北ドイツ放送交響楽団の定期演奏会を指揮、1953年より今年で34回を数えておりベルリン・フィルを始め、60余りのオーケストラを指揮。現在、大阪フィルの音楽総監督の他、日本指揮者協会々長、オペラ団体協議会々長、大阪音楽大学名誉教授などを勤め、精力的な活動を続けている。紫綬褒章、芸術院賞、西ドイツ大功労十字勲章、朝日賞、NHK放送文化賞、毎日芸術賞、ザ・シンフォニーホール・クリスタル賞、勲三等旭日中綬章、キワニス大阪賞、第４回「関西大賞・大指揮者賞」、オーストリア１等十字勲章等を受賞。又、指揮生活50周年を迎えた1989年には文化功労者に選ばれた。1987年７月、80歳を迎え、ベートーヴェン／シンフォニー・チクルス、R.シュトラウス／「アルプス交響曲」、マーラー／「復活」等各地で記念演奏会が開かれた。

又、首席指揮者の秋山和慶は、細心かつ緻密な音楽を得意とし、その華麗な指揮ぶりは多くのファンを魅了している。

レコード収録活動も活発で、ベートーヴェン交響曲全集（２回）、ブラームス交響曲全集、ブルックナー交響曲全集の他にもライブシリーズとして日本で一番多くのレコードを出している。

年間140回以上の演奏会を行い、多彩なプログラムで全国の音楽ファンにアピールしている。

■秋津智承

広島生まれ。８才よりチェロを始める。桐朋学園大学、ボストン・ニューイングランド音楽院卒。故斎藤秀雄、井上頼豊、安田謙一郎、ローレンス・レッサーの各氏に師事。在学中第46回日本音楽コンクール第２位、及び第８回チャイコフスキー国際コンクール第７位入賞。

ボストン・タングルウッド、ノーフォーク音楽祭を始め、国内では沖縄ミュージックキャンプ、清里、霧島等の音楽祭に出演している。

現在桐朋学園大学講師、水戸室内管弦楽団、コレギウム・ムジクム東京、広響客演首席チェロ奏者。

曲目解説

日下部 吉彦

●メンデルスゾーン：序曲「フィンガルの洞窟」

描写音楽の名曲として知られるこの曲は、メンデルスゾーンが、20歳のとき、スコットランドの北西海岸にある洞窟を見て着想した。

北極海に近い海の、激しさ、淋しさ、雄大さ、美しさ、ときにはやさしさ、といった情景を、見事にオーケストラによって描いた。ワーグナーをして“第一級の風景画家の腕”と感嘆させた作品である。

“序曲”とは、いわゆるオペラや舞台劇用の序曲ではなく、“演奏会用序曲”のひとつ。メンデルスゾーンは、このほかにも同種の“序曲”をいくつか書いている。

このときのスコットランド旅行は、青年メンデルスゾーンに、強い印象を与えたようで、この序曲が書きあげられたのが、３年後の23歳のとき、さらに10年たってから、交響曲第３番「スコットランド」を完成している。

●ハイドン：チェロ協奏曲　第１番　ハ長調

ハイドンのチェロ協奏曲といえば、第２番ニ長調が有名だが、この第１番は、実に200年近くもの間、図書館の書庫に眠り続けていた。やっと陽の目を見たのが1961年だから、戦後の、つい先年のことである。チェコの音楽学者によって、プラハ国立博物館で発見された。

ハイドンの作品には、常に真作か偽作かの論争がつきまとい、チェロ協奏曲に関しても、ホーボーケンの作品目録には、６曲があげられているが、そのうち、真作の証明があるのは、第１番と第２番の２曲だけ。あの有名な第２番でさえ、長い間、論議されてきたあげく、やっと自筆譜が発見されて論争にピリオドが打たれたのは、戦後のことである。

円熟期の51歳のときに書かれた第２番とくらべ、この第１番は、ハイドンの33歳から35歳のころの作品とみられ、バロック期のスタイルの名残りを留めている。エステルハージー侯の楽団で活躍していたチェロ奏者ヨーゼフ・ヴァイクルのために書かれたものらしい。（1765～67年ごろ）そして1961年に発見されるや、翌年の“プラハの春”音楽祭で初演され、一躍、脚光をあびるようになった。

第１楽章　モデラート　ハ長調　４分の４拍子。独奏チェロとトゥッティを、きわだって対比させてゆく書法は、バロックのリトルネロ形式の名残りであり、そこから、前古典派のソナタ形式へ進む過渡的な構成がみられる。

第２楽章　アダージョ　ヘ長調　４分の２拍子。ハイドンが“歌”の大家でもあることを印象づける優美なメロディーが聴かれる。独奏チェロと、弦楽セクションのみの楽章。

第３楽章　アレグロ・モルト　ハ長調　４分の４拍子。第１楽章と似た形式を持ち、バロックと前古典派との融合である。

●ベートーヴェン：交響曲　第５番「運命」

あまりにも有名な交響曲で、解説の要はなかろう。古今の交響曲の代名詞にさえなっている作品である。

ベートーヴェンは、９曲の交響曲を書き、第３番（英雄）第５番（運命）第６番（田園）第９番（合唱つき）と、“標題”のついた交響曲がとくに有名である。しかしこれらの“標題”は、「田園」を除いて、ベートーヴェン自身の名付けたものではない。

「運命」というニックネームは、第１楽章の冒頭の、タタタターという動機について、“運命は、このように戸を叩くのだ”と、ベートーヴェン自身が、弟子のシントラーに説明したと伝えられたことから、この呼び名がついたものだが、この呼称が、この曲の人気を高める重要な要素になっていることは間違いない。ネーミングというのは、大事なものである。

この曲が完成したのは、1808年で、「田園」と、ほぼ同時期に書かれた。初演も、その年の12月22日に、「田園」と並べて演奏されている。しかも、そのときにつけられた番号は、「田園」が第５番、「運命」が第６番と、現在とは逆の数え方になっており、「田園」の方が先に書かれたのではないかとの説もある。

ともかく盛りたくさんなコンサートで、このほかにも「合唱幻想曲」が初演されたりしており、練習不足で、惨々な演奏であったらしい。「運命」は、あまりいいスタートを切らなかったといえる。

しかし、９曲の交響曲のなかでの、この曲の占める位置は非常に大きく、「英雄」で、モーツァルトから完全に脱皮したベートーヴェンが、まさに彼独自の世界を創ったのが、この曲である。啓蒙期から、さらにロマン派の時代を切り開く先駆となるのも、この交響曲である。きびしい“運命”を超克して、第４楽章での、壮大な賛歌に到達するさまは、後年の“第九”にも通じるものがある。人類の残した不滅の名曲に数えられる理由が、そこにある。

（音楽評論家）